2020 年 6 月 28 日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所　主日礼拝　　NO.1126
聖　　書　　イザヤ書 61:1／ルカによる福音書 6:20~21
説　　教　　『 貧しい人の幸いと自由 』

このところ、コロナウィルスと格差撤廃行動の世界的広がりを、聖書の御言葉と重ね合わせて、現代の生きた文脈として受け取って来た。
自然の病気と人為的な格差は、とりわけ世の貧困層を苦しめているが、それにしてもなぜ、イエスは「貧しい人々は幸いだ」ときっぱり語ったのだろうか。

さほど昔の話ではない。私が学生の頃、都会のアパートは四畳半か三畳、風呂なしが標準。誰かの下宿で飲んでは雑魚寝状態で目覚めるのが常だった。
あの頃、コロナが流行したらどうなっていたか。誰かがバイトすると数名で赤提灯へ行けたし、若者のビンボーは貧困ではなかった。現代の貧しさの多くも、死と隣り合わせの絶対的貧困というより、世間の標準と比べての相対的貧困ではないか。

「さて、イエスは目を上げて弟子たちを見て言われた。〔貧しい人々は幸いである、神の国はあなたがたのものである〕(ﾙｶ 6:20)」。マタイ福音書は「心の貧しい人は幸いである、天の国はその人たちのものである(ﾏﾀｲ 5:3)」と三人称で語るが、ルカ福音書は二人称で「あなたがた」に直接語りかける。加えて「心の」という説明はなく、そのまま「貧しい人は幸いだ」と言う。それでは、弟子たちは貧困だったか。否、軽率だが真剣、無知だが燃える求道心を併せ持ったビンボーな若者たちであった。
「今飢えている人々は幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は幸いである、あなたがたは笑うようになる(ﾙｶ 6:21)」。この「あなたがた」も飢餓状態や、悲しみで身動きできないわけでもあるまい。
イエスは弟子たちを見て語ったのだが(6:20)、目を凝らすと背後に多くの群衆が見える(6:17~18)。イエスは険しく神聖な山ではなく、俗なる平地に下り、私たちが生きる「平らな所(6:17)」におられる。そして、イエスを注視する一人ひとりに応えて、「あなたがたは」と真っ直ぐ語りかける。

貧しさにしても、飢えにしても、悲しみにしても、なぜそれらが「幸い」なのか。語りかけられている弟子、つまりイエスの言葉を聞く私たちが「幸いである」とはどういうことか。
「幸い／makarios」とは最高の幸福のことだが、ギリシア的(一般)には健康で立場や金が充実していることを言う。イエスが語るヘブライ的な内実はそれとはまるで違う。物や条件は二の次で、何より第一に神の祝福が与えられての救いの喜び。
世の人が追い求める幸福要件ではなく、神と結びついていることの充足感だ。

「主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして、貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、捕われ人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために(ｲｻﾞﾔ 61:1)」。まさしくイエスは、この預言をその身と命によって表した。

イエスが語られた場面を思い描いてみよう。「イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた(ﾙｶ 6:20)」。これを聞く私たちは、イエスのまなざしの内にある。言い換えれば「主なる神の霊がわたしをとらえている(ｲｻﾞﾔ 61:1)」のだ。
イエスのまなざしの中で私たちは、聖霊に捉えられ「貧しい人々は幸いである(ﾙｶ 6:20)」という力ある御言葉を聞く。貧しい人にこそ福音(良い知らせ)は伝えられる(ｲｻﾞﾔ 61:1)。

私たちは挫折するが「打ち砕かれた心」は愛で包まれ、世の相対的な価値観につながれた人々を解き放つ(61:1)。そして神の聖霊は、被造物を捕える死の力からも、私たちを自由にするだろう(61:1)。

★

≪おまけのひとこと≫
富んでいる者や満腹している者は不幸　笑っている者や褒められる者も不幸だと言う（ﾙｶ 6:24~26）
空腹は腹が空っぽである状態　すべてを恵みとして受け入れられる　すべてが恵みそのものだから